「『人間の尊厳』の根底にあるもの」

──「世界の中の日本」──

鈴鹿国際大学での特別講義　１９９５年５月９日

奥田昌道

# 【見出し】

１、聖書は西洋思想の源流

２．天地万物の創造の由来──創世記1･1～2･4

３、人（霊止）の創造──創世記2･4～25

４、個人の尊厳と婚姻──世界人権宣言

５、社会生活における人の倫理──レビ記19･1～18

６、人と神の関係──申命記10･12～21

７、真理はあなたを自由にする──ヨハネによる福音書8･31～47

８、御霊の導きによって愛の人にされていく──ガラテヤの信徒への手紙5･13～26

資料　「世界人権宣言」

# １、聖書は西洋思想の源流

皆さん、こんにちは。ただ今、かつての同僚の中沢先生から、あまりにも良く知り過ぎておられるので、赤面するようなこともいろいろおっしゃっていただきましたが、申し訳ありません（笑い）。そんなことで今日、この席に登場することになったのです。私も来年からは、この学校の専任教授になります。今年、皆さんにお目にかかるのは今日が初めてだと思います。去年は一年生の方々の「現代社会と法」という授業を受け持っておりましたので、ずっと一年間お付き合いがありました。今年は二年生の「法と人権」、「民法」の二つの講義を月曜日に受け持っておりますが、一年生の諸君とは今日が初めてです。

「世界の中の日本」という主題で私は春と秋に一回ずつ講義をするように学長から言われておりまして、それで今回、第一回目ということになります。皆さん、資料を御覧になって、おやおやと思われたかも知れません。横書きのレジュメ、それから、立て組の資料と二つ配っていただいております。なぜ、おやおやということかと言いますと、資料の方では聖書のから引用してあります。横組みの方もどが聖書の思想ということで聖書の根幹をなすようなところをピックアップして引用しております。それで、何のお話しが出てくるのだろうとお考えになるかも知れません。

それから、もう一つは縦の資料に「世界人権宣言」というものを引いております。随分、時代の隔たりがあるわけです。この聖書の創世記と申しますと、古いところでは紀元前９５０年頃に編集されたということです。かたや世界人権宣言は１９４８年、第二次大戦後、これから世界が平和に向かって新しい出発をしようというときに、その前の国連憲章を踏まえて、三年後に世界人権宣言が出されたわけです。ところが、この世界人権宣言というものにうたわれている理念は、さかのぼりますと、こういった創世記に始まる聖書に源流があるように見ざるを得ない面があります。今日の主題であります「「人間の尊厳」の根底にあるもの」という、「人間の尊厳」ということは、我々はもう教育を受ける当初から、人間の尊厳ということの重大さ、大切さを教えられてくるわけです。しかし、果して人間の尊厳というのはどういうことなのか、またそれが何に由来しているのか、そういうことについては、残念ながら、特に日本においては、そんなに深い考察がされているとは思えません。そこで皆さん、これから大学で勉強され──生涯、人生は勉強でありますけれども──そういう勉強をしていかれる上で、目を世界に広げ、特に西洋思想の源流というところにさかのぼって問題を考えるきっかけをつかんでいただきたい、そういう思いで今日の講義を準備いたしました。

それぞれ民族というものは、建国の歴史をもっています。あるいはそれぞれ神話的な形で、世界というものはどうやって創られたのか、という歴史や神話をもっています。今日、引用いたしました創世記はいうまでもなく、パレスチナのイスラエル民族に伝えられてきた天地創造の神話です。ところが、イスラエルというちっぽけな民族に、しかも古い時代から伝えられてきたと言いますが、その伝承が実は欧米の精神史、あるいは欧米文明の基礎を形つくっているということに注意をしていただきたいわけです。つまり、ヨーロッパ文化だとか、ヨーロッパの精神史を理解しようといたしますときには、この創世記とか、それに続きますイスラエル民族史──これは旧約聖書でありますが──そして民族史の中に現れた神の──イスラエルの人たちはそれを神の啓示として受けとりました──その神の啓示の内容を正しく理解していくということが欠かせない必要条件になってまいります。

# ２．天地万物の創造の由来──創世記1･1～2･4

ここに引用しました創世記は、クリスチャンの方だったらもう当然何度も読んでいらっしゃると思いますけれども、そうでない人にとっては、あるいは初めてかも知れないし、伝え聞いたかも知れません。アダムとイブの物語などは良くご存知だと思います。この創世記は、ここに引用したのは１章と２章です。これは実は二つの資料から成り立っています。１章の全部と２章の４節の前半、そこまでが一つの資料です。それからもう一つは２章の４節後半からの部分です。２章４節後半からの部分の方が実は古いので、これは紀元前９５０年頃に執筆されました。そして、前半の１章の部分は紀元前５３０年代以降に編集されたと言われています。この創世記は、言うまでもなく神話でありますから、決して自然科学的に天地はこのようにして創造されたと言っているのではありません。神話という形をとって、そこに何か我々の胸を打つような深い真理が隠されている、というつもりで受けとっていただきたいと思うのです。ではまず、読んでみます。

天地の創造

≪創世記第１章≫

　初めに、神は天地を創造された。地はであって、がのにあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

　「光あれ。」

　こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

　神は言われた。

　「水の中にあれ。水と水を分けよ。」

　神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

　神は言われた。

　「天の下の水は一つ所に集まれ。いた所が現れよ。」

そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

　「地は草をえさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつけるを、地に芽生えさせよ。」

　そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

　神は言われた。

　「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」

　そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。

　神は言われた。

　「生き物が水の中にがれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

　神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。

　「めよ、えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

　夕べがあり、朝があった。第五の日である。

　神は言われた。

　「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

　そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

　「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

　神は御自分にかたどって人を創造された。

　神にかたどって創造された。

　男と女に創造された。

　神は彼らを祝福して言われた。

　「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

　神は言われた。

　「見よ、全地にえる、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

　そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それはめて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。≪創世記第２章≫

　天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、なさったので、第七の日を神は祝福し、された。

　これが天地創造の由来である。

（創世記１章１節～２章４節）

ここまでが、神に仕えるたちの編集によるものです。イスラエルの歴史で言えば、バビロンという一つの時期があり、バビロン捕囚が終わりましたのが紀元前５３８年ということで、それ以降に編集されたといわれている天地創造に関する物語なのです。これをご覧になりますと、どういうことを皆さん、感じられるでしょうか。第一日から第六日まで六日かかって天地万物を創造されたということです。

それから、順序をちょっと見て下さい。最初に「初めに」という。初めがあれば、終わりがあります。それで、終わりのことは、聖書ではヨハネというところに書かれていますが、「初めに」は、聖書の一番の創世記です。私がここに引用していますのは、「新共同訳」と申しまして、カトリック教会とプロテスタント教会のそれぞれの聖書学者の方々の協力によって成ったものです。その訳をここに引用しています。

「初めに、神は天地を創造された。地はであって、がのにあり、神の霊が水の面を動いていた。」

これが最初の状態であったというわけです。混沌で、闇がおおっている。そして、水の面を神の霊が動いている、そういう状態です。

それで、第一に神が創造されたのは何かと言えば、「光」なのですね。

「神は言われた、光あれと。そうすると、光があった。」

と、ここに一つの思想が現れています。我々は何が一番欲しいかといえば、暗闇の中では、光が欲しいわけです。真っ暗闇の時に光が欲しい、それをここで、

「光あれと言われたら、光があった」

という。これが第一日であります。それから、第二日目に創造されたのは、水から大空を分離されたということになります。大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。大空を天と呼ばれた。これが第二日です。第三日目に造られましたのが、土と植物です。乾いた所が現れてくる。水は一ヵ所に集まる。こうして陸地と海とに分けられる。水が集まった所を海と呼ばれる。そして、地は草をえさせます。種を持つ草、それぞれの実を実らせる、そういうものがそこに造られてまいります。次に第四日目に造られたのは、太陽、月、星などです。天体を造られた。それぞれ、昼を守る役目、夜を守る役目ということになっています。第五番目にと鳥、海の中の魚とか貝、それから空を飛ぶ鳥を造られた。そして、第六番目には、地上の動物たち、そして最後に人間ということになっています。

つまり、人間というものは一番最後に造られています。一番大事な光と一番大事な人間が初めと最後に造られていることになります。そして、神は

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」

と言われた。27節の、

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」

というところに人の創造というものが何であるかということが強調されて書かれていることがわかります。

神は見えない存在ですから、何も人間が有形的に神の形をしているわけではありません。「かたどって」ということはその内面性ということになります。

人の内面性が神の似すがたであります。神のがどういうものであるか、一言で言えば、私は「愛」だと思います。

愛を本質にしている姿です。愛ということについてはこれからずっと出てまいりますので、今はその程度にいたします。それから、

「男と女に創造された」

ということが出ております。そして、人間も含めて動物たちの食物は何かと言えば、種を持つ草、それから、果樹などです。決して、弱肉強食の世界ではなかったということがここにうかがえます。草はいくらでもえてきます。果樹だって、果物をもぎ取っても、また次の年に果物を実らせることができます。そのように、全体を見ますと、鈴鹿の学園の風景のように、実にのどかな風景がそこに展開しています。そしてそれぞれの所にありましたように、造られたものは皆、

「しとされた」

というのがあります。そして、一番最後のめくくりに、31節

「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それはめて良かった。」

これが第六の日。そして最後に、

「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、なさった。この日に、神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、された。」

とあります。「創造」といいますのは、愛のなのです。しかも、人間の造ったものは、すぐ消えて無くなるようなはかないものが多い。ここでいう「創造」という言葉は単に物を造り出すというだけではなくて、

「造ったものがそのまま維持され存続し、永久に至るという質のものとして造る」

というだそうです。つまり、神が創造されるというとき、本当の愛を込めて造っていく。それで、

「造られたものはみんな良かった」

とあります。

これを皆さんの日常生活に、私も先生方も含めて、あてはめていただきたいと思います。本当に実りのある仕事をしたときには満足感があります。そして、やったことがだ良かったと、満足してゆっくり休むと、これは非常にしい生活スタイルだと思う。ところが、現実の自分たちというのは、いつもやっぱりだめだったとか、ちっとも進まなかった、失敗ばかりしていたと、そのようなきが多い。あるいは、がむしゃらに働いて働きまくって休みを取らない。すると、過労死ということにもなります。ヨーロッパの人たちは「過労死」という日本語を知っている。ヨーロッパの人たちはこの聖書を基本にしていますから、ちゃんと働く日と休む日をわけている。日本人はこういう思想がありませんから、働きまくるわけです。そうすると、ヨーロッパの人たちから見たら、日本人は異様に映ります。をすると「エコノミック・アニマル」と変な名前を付けて呼ばれてしまいます。

「けはうまいけれども、少し気味の悪い人種である。あれは休むことを知らない」

ということになってしまいます。考えてみますと、我々の七日制、このごろは週休二日で、週五日制ぐらいになりましたけれども、だいたい月曜から土曜まで、学校でも会社でもみな仕事があります。日曜日は休むという、六日の間働いて七日目に休むというのは聖書からきているのです。これは特にあとで、モーセのというのがあります。イスラエル民族が紀元前１２９０年頃にエジプトで奴隷状態でいましたとき、モーセの導きによってエジプトから脱出していきます。そして、シナイの山でモーセは神のをいただくという場面があります。その時に、

「六日間働いて七日目は休みなさい。これは神のの日だから、そのときは家畜も労働者もすべての人に等しく休みを与えなければならない」

とあります。

「どんなに忙しいときでも、この日は完全に休みなさい」

と。になりますと、「働いてはいけないのかなぁ」という受けとり方になるでしょうけれども、それは実はなのです。

「ゆっくり休みなさい。私が責任をもってあげるから、あなたはゆっくり休みなさい」

という神の祝福なのです。

動物たちにとっても家畜にとっても、日頃の重労働から解放されてゆっくり休むことができるという休息なのです。それで、「夕べがあり、朝があり」でしょ。昼は働き、夜は休む。それから六日働き七日目に休むという、ダッシュするときとエントシュパネン（独entspannen める）するときと、緊張するときと緩めるときと、このリズムが交互にゆくと長続きする。マラソンだってそうですよ。皆さん、テレビでマラソンレースをご覧になっていますと、２５㎞ぐらいまで先頭をリードしていた選手がいつのまにか、姿が見えなくなりますね。やや真ん中りにつけていた選手が段々上がって来て最後、ゴールに入るという光景を良く見ます。リズムが大事だということ。我々の生活にはやはりリズムが大事です。この頃のように、衛星放送があって２４時間、テレビで放送されていますと、寝る時間が無くなって授業の時間になると寝るのじゃありませんか（笑い）。

創世記１章の私の感想はと申しますと、

「このように神は創造された。それは非常に良かった。そして大変満足されて、七日目にお休みになられた」

と。これは私たちの生活の中にぜひ取り入れたい面だと思います。

それから、もう一つ大事なことは人間のことです。

# ３、人（霊止）の創造──創世記2･4～25

次に創世記２章の方にまいりましょう。２章４節から、これは別の資料で、神の名を「ヤーウェー」と呼んでいる人たちの手になるもので、「J資料」と聖書学では言われています。紀元前９５０年頃編集されており、こちらの方が古い。そして、この２章４節の後半部からはもっぱら人間の創造のことが書かれています。アダムとイブの物語はここからきています。読んでいきますと、

　なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草もえていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土をす人もいなかった。

　しかし、水が地下からき出て、土のをすべてした。なる神は土（アダマ）ので人（アダム）を形づくり、その鼻にの息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンにを設け、ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。

　エデンから一つの川が流れ出ていた。園をし、そこで別れて、四つの川となっていた。第一の川の名はピションで、を産出するハビラ地方全域をっていた。その金は良質であり、そこではまた、のやラピス・ラズリも産出した。第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。　なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこをし、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

　「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

　なる神は言われた。

　「人がりでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

　なる神は、野のあらゆる、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへもって来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

（創世記2･4～20）

今、読みましたところは、神のことを「なる神」という呼び名で呼んでいます。１章の方では、神は「神」と書いてあります。こういうところからも、別の資料だということが分かります。それはともかく、ここでは人間がどのようにして造られたかということ、土から、しかも土のからなのです。皆さん、文句が出そうですね。

「何だ、おれは土の塵から造られたのか、土の塵から造られたじゃないか」

と。いや、粕なんだけれども、その粕が

「神はその鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」

と。ここに値打があるのです。

どんなに土の塵から造られた粕であっても、そこに神の命の息［神の霊］が吹き込まれて、生きる者［人］となった。インスパイア（英inspire吹き込む）と言いますね。聖書は、

「人は土から造られた。だから、死んだら土に帰る」

という。聖書にはこの思想がずっと流れています。人は土から造られたのだから、やがてこの息が出て体を離れますと、また土に帰って行きます。しかし、息を吹き込まれた、された霊、これは人間の中心だということ。この人の霊、これは永遠不滅のものなのです。この霊がいつも神様と一緒になっていると、清い世界に生きていく。愛の世界に生きる。ところが、闇の世界に引きずり込まれると、大変なことをしでかす。そのことは、ここには引用しませんでしたけれども、次の創世記３章のののところに出てくるわけです。そして、人間はしていくというお話につながりますが、あれは神話ではありますけれども、非常によく人間の本質を表しています。この、

「霊（命の息）を吹き込まれて人は生きる者となった」

ということを心に留めていただきたいのです。

日本にという大きな辞書があるのをご存じでしょうか。という書店から戦前から発行されている大きな辞典ですが、そこに「人」という項目がある。それを見ますと、「ひと」の語源として、

「ひとは、がまると、もともと人のことをこのように書いた」

とあります。そして解説として、

「のまる存在、これがひと、である」

と。神霊が止まっていなければ、それは人ではない。動物であるかも知れない、生き物ではあるかも知れないけれども、いわゆる人格としての人ではない。これは大言海という辞典の中にそのように書いてある。ですから、日本においても、言葉のことをと言ったり、のことを（）と読んだり、古来から非常に神秘的な思想は流れている。だから、さきほど、

「どの民族にもそれぞれの歴史がある。また民族のそういった信仰を要約する物語がある」

ということを申しました。聖書の方では、

「息を吹き込まれると、生きる者となった」

と、このことに気をつけていただきたい。

それから、もう一つは、ずっと見ていきますと、２章18節に、

「人がりでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」

とあります。「助ける者」ですが、たくさんの動物がいます。それを全部神様はアダムの所に連れて来られた。「どうだ、気にいったか」と。パンダもいたのか、知りませんよ（笑い）。いろいろな動物がいた。だいぶん、心を動かされてもやっぱり、「私のではない、助ける者とはならない」と、アダムは失望します。

「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った」（創世記2･21～23）

目覚めると、美しい女性が立っていた。アダムは感嘆の声を発するわけです。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨、

わたしの肉の肉。

これをこそ、女（イッシャー）と呼ぼう。

まさに、男（イーシュ）から取られたものだから」（創世記2･23）

ここに男女というものはもともと一体であると。どこから出てきたかといえば、男から女が出たということになっていますけれども、どっちにしてもそれは一体であると、このことが表明されています。お互いに他を必要とする。お互いに他の存在なくして、自分独りではあり得ないという存在です。

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人ともであったが、恥ずかしがりはしなかった」（創世記2･24～25）

ここに私は西洋におきます、結婚というものの思想がよく現れていると思う。ご承知のように西洋は個人主義ということで非常に個人という人格を大切にいたします。日本はどちらかといえば、集団主義ですね。何か、たくさんの中にしていれば安心しています。ところが、独りで立つということはどうもいというか、られる。だから投手のように一匹狼でアメリカへ渡って活躍すると、ああいう非常に個性的な人は日本ではちょっときにされますね。ところが、ヨーロッパでは個人です。

なぜ、個人かといいますと、さっきの神から（神の息が吹き込まれる）された存在なのだから、他人がどう思うかは問題ではない。

「あなたは、あなたという人格は他の人とは違うのだ。あなたは地上でただ独り、掛け替えのない尊い存在として造られている、されているのだ」

ということで、個人というものが非常に尊重されます。

と同時に、ここで見落としてはならないことは、なるほど人格としては個人ですが、男女という面では、夫と妻、男と女というものは一体となって、またそれが一つの単位である。男は女性を必要としますし、女性はまた男性を必要とする。どっちが偉いかという問題ではない。これは、二人は一体なのです。そして、子孫が生まれていく。

「産めよ、増えよ、地に満てよ」

とありますように。こういう見方が創世記のところで表れている。そのことにも注目していただきたいわけです。

# ４、個人の尊厳と婚姻──世界人権宣言

今この資料を見ていただいているついでに、世界人権宣言（１９４８年１２月１０日、第３回国際連合総会において採択）のところをちょっと見て下さい。

「第１条　すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いにの精神をもって行動しなければならない。」

男であろうと女であろうと、また、どういう生まれであろうと、すべて人間は生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神──これは愛ということですね──この精神をもって行動しなければならない。これが第１条です。それから第１６条を見ますと、

「第１６条　　１　成年の男女は、人種、国籍又は宗教によるいかなる制限をも受けることなく、婚姻し、かつ家庭をつくる権利を有する。（以下略）

２　婚姻は、婚姻の意思を有する両当事者の自由かつ完全な合意によってのみ成立する。

３　家庭は、社会の自然かつ基礎的な集団単位であって、社会及び国の保護を受ける権利を有する。」

このように、世界人権宣言の第１６条は婚姻ということを非常に重んじております。この起源は、私はやはり創世記にあるのではないかと推測いたします。昨今、個人主義の思想が強調されるあまり、家庭とか、そういう男女の結合としての婚姻というもの、結婚というものに対して、否定的な考えをする人が増えてきています。家庭は不自由である、もっと一人ひとり自由で、好きなときにくっついて好きなときに離れるのがいいのだという考え方。極端に言えば、セックスといった考え方がはびこって来ておりますけれども、それは決して健全ではないと、私は考えています。の中から新しい世界秩序を造り上げようと、人類がもう一度新しい理念をもって、理想に燃えて、国際社会を造ろうという思いで宣言されたのが世界人権宣言だと思います。

その中で「個人の尊厳」ということと、「自由」あるいは「平等」ということと、それから「家庭」というものを大切にするということをここにうたっていることは、非常に意味が深いと考えております。

そこで、次に、レジュメの方に移っていただきます。今日、お話し申しあげたいことの要点があります。まず、「I 聖書（キリスト教）の思想」というところで、聖書から引用した一番目が旧約聖書の創世記１章～２章、これは今朗読したところです。そして、下のほうの①、②というところに、私の申し上げたい要点があります。一つは、

①人間は神によって、神にかたどって創造された。ここに「人間の尊厳」の根底がある。「神にかたどって」とは、有形的な形のことではなく、内面的な本質のことである。神の本質は「愛」だから、「愛」を本性とする存在として造られたわけである。

もう一つは、

②「人間」の尊厳は個人の尊厳であるとともに、人は男と女に造られ、

「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」

とあるように、夫妻が独立の一つの単位とされている。婚姻（結婚）を聖なるものとして尊ぶことにも注意を要する。

ということであります。創世記に関しては、以上であります。

# ５、社会生活における人の倫理──レビ記19･1～18

次に旧約聖書のレビ記というところに移りたいと思います。レビ記というのは、さっき言いましたモーセが、エジプトでイスラエルの民が奴隷状態にあったとき、民をいてエジプト脱出をいたしました。それからシンの荒れ野を経て三日目にシナイの荒れ野に到着します。そして、モーセがシナイ山に登って、神からをいただく、というくだりが出てくる。そういったことを背景として、後の時代に作成された文書、これがレビ記なのです。成立年代としましては、だいたい紀元前６世紀の前半頃ということです。私がなぜこれを引用しているかといいますと、人間の尊厳ということの一つの、日常社会生活における具体的な姿がここに書かれているからであります。

「主はモーセに仰せになった。イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。

　あなたたちはなる者となりなさい。あなたたちの神、であるわたしは聖なる者である。

　父と母とを敬いなさい。わたしのを守りなさい。わたしはあなたたちの神、主である。（中略）

　穀物を収穫するときは、畑のまで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者やのために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

　あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いにいてはならない。わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

　あなたは隣人をげてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝までばしてはならない。耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神をれなさい。わたしは主である。

　あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱い者をってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。民の間で中傷をしたり、隣人の生命にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主である。

　心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。してはならない。民の人々にみをいてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしはである。」（レビ記19･1～18）

これは、紀元前１２９０年から１２５０年を舞台装置にしながら、編集されたのが紀元前５３０年代と言われています。どっちにしても今から２５００年前の古い時代にこういう文書が編集されています。日本のそのころはどういう状態だったかということを思いながらこの内容を見ますと、人間の倫理として実に内容が高度です。非常に高い道徳と申しましょうか、そういうことがここでうたわれています。そのことに私は実は驚くのです。現代に全くそのまま通用するということが言えるような内容です。

それが一つと、それから特にこれはレビ記19章の特徴なのですけれども、それぞれの語りかけの後ろに

「わたしはである」

という言葉がある。これが単なる道徳ではないということに気づいていただきたいわけです。イスラエルの民族にとりまして「神」とか「」というときに、それは人類の神とかそんな思いはない。自分たちがかつてエジプトで奴隷の苦しみの状態にあったときに、指導者モーセを通してこの苦難の中から脱出せしめられ、助けていただき、そして今は自由の身となった、苦難からの解放をった、そういう意味の具体的な救いという意味において神のことを「」とか、「神」と呼んでいるのです。

その神はまたイスラエルの民に対して、

「私はおまえたちの神である、おまえたちは私の愛する民である。」

という、神と民との非常に熱いハートのった信愛関係がそこに成り立っている。

「よその民族のことは知らない。それぞれの神様がいるだろう。しかし、イスラエルの民族よ、あなた方にとっては私をおいて他に神はないのだ。なんとならば、私はお前たちを助けたのだから、私から離れては、お前たちは実にめなのだ」

という言い方です。そういう私の民であるあなたがたはどういう姿でいて欲しいかと。

「私がであるようにあなたがたも聖であって欲しい」

と、こうきたわけです。これは大変なことです。聖なんていうのは神様だけの属性ですよ。あなたがたの中で「私は聖です」と言える人はありますか。聖子ちゃんという名前もありますけれども、親の願いが込められているのでしょうけれども、人間は本当のところ、絶対に聖ではあり得ない。自分は聖だという人を私は信用しません。そんなに人間は聖になり得ない。しかし、神様からは、

「私は聖である。お前も聖であれよ」

という神の願いが込められているのです。皆さんはまだ子供を持っていないから分からないでしょうが。皆さんは子供さんで親からいろいろなことを言われているでしょうけれども、親は、

「私の子供じゃないか、そんな馬鹿なことをするはずがない」

と言います。非行に走った子供たちが親のところに連れて来られると、

「私の子に限ってそんなことをするはずがありません」

と、親は言うそうです。そうではなくて、「やはりやりましたか」と言う親はこれはだめですね。

「他の人は信じてなくても私だけは子供を信じています」

というのが本当の親の心です。皆さん、人の親になられたら分かります。それがこれなのです。神と民との関係はそういうで結ばれている。だから、

「私は聖である。お前たちも聖であって欲しい。いや、なれるよ。私がしてみせるぞ」

という神の熱愛なのです。熱愛の言葉です。戒めに見えていますけれども、これは全部そういう意味で、

「私はならぬお前の神ではないか、お前はかくあるはずだよ」

と。「こうであらねば。これ以外にはあり得ないではないか」という宣言、呼び掛け、そういうふうに受けとります。その中身は、第一は「聖」ということが出てきております。

その次は、

「父と母を敬え」

それから、

「安息日を守りなさい」

と。ここまでは縦の関係です。神様との関係なのです。父母との関係も、実は神様との関係という縦の関係の中に入れられていることに注目して欲しい。私はさきほど、夫妻という横の関係、これが社会の単位であると申しました。個人の尊厳ということ、個人が尊ばれるということ、そして社会の単位としては夫婦が中心だということを申し上げました。それでは、父母という上の関係はどうなっているのか。「キリスト教は親孝行なんかしなくて良いと言っているのか」と、戦前、誤解されたこともあるけれども、ここにも「父母を敬え」とありますように、父母無くして自分の存在はない。そういうわけで、「父母を敬う」ということは「神を敬う、信じる、尊ぶ」ということとイーコルの位置にあるということです。これをちょっと申し上げておきたいと思います。

それから次の、穀物を収穫するとき以下は、隣人関係です。貧しい人がいます。しかし、貧しい人にもプライドはあります。いをしたくない、そういう貧しい人たちがめな思いをしないで自分に必要な物を手に入れることができるように、麦刈りをした後、麦の稲穂を残しておく。ぶどうの収穫があったときにはぶどうを残しておく。「残っている物を取る」ということは、神によって許され保証されていたのです。ですから、

「貧しい者や寄留者（外国人）のために残しておきなさい」

と。それから後は盗みだとか偽りだとか、今で言う刑法的な内容のことです。それから、

「雇い人の給料をしっかり払え」

と。一見、何でもないことのようですが、えてして小規模の経済単位の雇い主という者は雇い人の給料を不払いして、踏み倒してしまうことがどの社会にも見られるわけです。それに対して、

「雇い人のはその日のうちにちゃんと払いなさい」

というようなことが言われています。それから、体の不自由な人は昔は軽蔑されました。それに対して、

「耳の聞こえぬ者、目の見えぬ者を大切にしなければならない。私は主である」

そういったことがずっと出てきます。最後にまとめとして、

「自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」

これが最も大事な戒めなのです。自分自身を愛するというのは人の本性です。人は放っておいても自分をかわいがります。そのように、

「隣人を愛せよ」

と、これでレビ記19章が終わっているわけです。

# ６、人と神の関係──申命記10･12～21

それから同じようなのが次のに出ておりますので、ちょっと見ておきます。申命記もレビ記と年代的にはほぼ同じような時期ですけれども、実は紀元前６２１年にイスラエルでは一つの宗教改革がありました。その前後の作品だと言われています。読んでみますと、

「イスラエルよ。今、あなたの神、があなたに求めておられることは何か、ただ、あなたの神、主をれてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主にえ、わたしが今日あなたに命じる主の戒めとを守って、あなたが幸いを得ることではないか。見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。主はあなたの先祖に心を引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。心のを切り捨てよ。二度とかたくなになってはならない。あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の、偉大にして勇ましく畏るべき神、人をり見ず、を取ることをせず、との権利を守り、を愛して食物と衣服を与えられる。あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってそのによって誓いなさい。この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である」（申命記10･12～21）

モーセが民に語り伝えた内容ということでこういうふうにされているわけです。この内容ですが、さきほどのレビ記と非常に似ています。やはり、神と民との縦の関係、これを基本にして語られています。人間という者は非常に尊い存在です。ところがその人間が人間としてうな道を歩いて行くためには、導き手がいります。さきほど、

「人間は霊を吹き込まれた存在だ」

と言いましたが、その人間の中に宿っている霊が神の霊と結びついて、この導きの通りに歩いて行くならば、うな道を行くことができる。しかし、これがあらぬ方に心引かれて神とのつながりが切れてしまうと、どこに行くか分からない。これが聖書が語っていることなのです。

さきほど、創世記２章17節の中でわざと触れなかったのですが、

「善悪を知る木、これから取って食べてはならない。これを取って食べると必ず死ぬ」

と、非常にめいたことが書かれていました。あれはどういうことかと言いますと、「善悪を知る木の実を食べる」ということは、

「神との関係を断ち切って、自分で善悪を判断して、自分の力で歩いて行く」

という方向を意味しています。それで、蛇がアダムをすのですが、

「あなた方は決して死ぬことはありません。あの善悪を知る木の実を食べるとくなって、神のようになれるのです」

と言うのです。それで、その言葉に誘われて、木の実を食べてしまうわけです。善悪を知るということ自体は大事なことですが、

「自分が神の如くなってしまう」

それが恐ろしい。人間というものは、人間であらねばならないのです。人間は、限りなく神の方からいろいろな良きものをいただく存在です。

私は人間というのは真・善・美を追求していく存在だと思っています。そして、人間の本質は何かというと、「愛」である。活動としては真・善・美を追求し、本質的には愛であるという、こういう人格が人間の本来の姿だと思います。

善悪を知る木の実を食べて、

「神なんか要らないよ。私は一人立ちをするのだ」

と独立宣言をしますと、あらぬ方向へ進んで行く。それはいろいろな宗教が表しています。がになります。そうしますと、

「神に代わって世界を征服しよう」

とかてたりします。善悪を知る木というのは非常に意味が深いわけですけれども、今のを読みまして感じますことは、

「人間は神との関係を断ち切ってはならない」

ということ。その神は、本当に人間が全存在をその前に投げ出してする神、相対的な人間に対して絶対的存在としてみ、しかもそれを導き祝福を与える見えざる神です。

絶対者という言葉はあまり好きではありませんが、イスラエルの宗教は、

「絶対に神を形造ってはならない。を造ってはならない。目に見えない神だけを信ぜよ」

と言う。大変きついことです。いかなる像をも作ってはならない。そういう目に見えない神に導かれつつ進んで行く。そうしたら、何がり所になるかといえば、言葉なのです。

「初めにありき」

というように聖書の言葉なのです。この言葉が聖書というような文書でされていく。の言葉ということでしょう。

そういう言葉というものを拠り所にしながら、見えない神に導かれて歩んで行く。その拠り所として聖書が残されているという構造だと思います。そういうことをこの申命記もよく表していると思います。

# ７、真理はあなたを自由にする──ヨハネによる福音書8･31～47

それから、新約聖書の「ヨハネによる福音書」の方にいきます。ヨハネによる福音書というのは、成立年代からいいますと、だいたい紀元後９０年～１２５年ぐらいの間に書かれた書物だと学者は言っています。いうまでもなく、イエス・キリストという方のことを中心にしながら、その言葉、行為をしています。８章ではユダヤ人との問答です。簡単に申しますと、ユダヤ人はキリストがなさった、ある病人に対するの、それがたまたまになさった。ユダヤ人にとっては、安息日は休まねばならない。第七日ですから。ところがキリストは休まれなかった。安息日にも病人をしたり、苦しんでいる人を助けたりされた。キリストは、

「神様は人を活かす方だ。病気で苦しんでいる人を安息日に活かしてあげることは正に神のではないか」

と言われた。それに対して、ユダヤ人はに反すると言って、キリストを殺そうとした。そういう背景があります。そこで、問答が始まりました。その問答は、

「真理とは何か、自由とは何か、罪とは何か」

そういう非常に内面的な問題が取り上げられていますので、ちょっと長いですけれども、読みます。

「イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする』」（ヨハネ8･31～32）

と。

「真理を知るならば、本当に自由になる」

とあります。私が留学しておりましたフライブルク大学（ドイツ）の赤レンガ建築の講堂の壁面の一番よく見えるところにこの言葉が大きな大文字の金文字で書かれていました。

“ .”「真理は君たちを自由にするのだ」

という言葉が刻み込まれてありました。

「すると、彼らは言った。『わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。「あなたたちは自由になる」とどうして言われるのですか』イエスはお答えになった。『はっきり言っておく。罪を犯す者は誰でも罪の奴隷である』」（ヨハネ8･33～34）

この「自由」ということをイエスが言われた。そこで、ユダヤ人たちは、

「自分たちはアブラハムの子孫で自由ですよ」

と言った。キリストは

「そうじゃない。あなた方の内面は実は不自由だ」

とお答えになった。どういう意味で不自由かといえば、

「あなたがたは罪を犯す。罪の奴隷である。自分でどんなに自由であろうとしても、この罪の縄目から逃れられないではないか」

ということを言っておられる。このことは非常に私たちにも身につまされる思いがいたします。それから、飛ばしまして、

「もしがあなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」（ヨハネ8･36）

「子」というのはイエス御自身のことを意味しています。イエスだけが本当に「神の子」として自由だった。一言申し上げますならば、実は神の子だから自由なのではない。イエスという方の存在はさきほどのレビ記とか申命記を地でいっておられた存在なのです。

イエスという方は神のことを「父」と呼んで、自分のことを「子」と自覚する。また、神のことを「」と呼んで自分は「」として自覚する。

そして、イエスという人の在り方は神様がオール（英allすべての）なのです。神様が存在の根源、すべてなのです。そして、

「自分はそのを行う」

という、それだけがキリスト・イエスの生きるプリンシィプル（英principle原理、道）、生き方だった。

別の言い方をすれば、がない。なのです。がない。エゴがない。エゴイストではなかった。神のだけが自分の意だった。そういうイエスが実は自由だった。ユダヤ人は「私は自由だ」と自覚しているのですが、実は不自由だった。それは神の意をじていない。なぜ、行じていないかと言えば、神の意を行じているイエスを殺そうとしているではないか。そこにはっきりと現れていると。こういう問答がここに続いているわけです。

「『あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。』

　彼らが答えて、『わたしたちの父はアブラハムです』と言うと、イエスは言われた。『アブラハムの子なら、アブラハムと同じをするはずだ。ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。』

　そこで彼らが、『わたしたちはによって生まれたのではありません［不義の子ではありません］。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です。』と言うと、イエスは言われた。『神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをおわしになったのである。わたしの言っていることが、なぜ分からないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。』」（ヨハネ8･37～44）

これは非常にきつい言葉ですね。

「あなたたちは悪魔である父から出たものである」

という。待ってくださいよ、わたしたちは神に造られた者ではありませんか。創世記にちゃんと書いてあります。生命の息を吹き込まれて、内的には神から出た者だ。そのはずなのにイエスから、

「あなたたちの父は悪魔だ、あなたたちは悪魔から出た者だ」

と言われた。一体これはどういうことですか。それはさきほどここで、

「人間という者はいつしか神を見失って、自分の勝手気ままに動き出した。そのとき悪魔が忍び寄って来て人間をうまく自分の手下にしてしまった」

と申しました。自分は気づいていない。自分は気づいていないのだけれども、いつのまにか悪魔の手下になってしまうという自分に、あるとき突然に気づいて、とするのが我々の本来の姿、日常の姿です。そういう体験というのはそう簡単にできるものではありません。自分ということに関して悩んだり、自分は本当にこれで良いのだろうかと、悩んだり、いろいろなことで皆さんがこれからいろいろな悩みにぶつかられるときに、

「そうだ、自分というものは、自分が主人になっていた。本来のである方は別に在るはずだ。神に造られた者は、神に従って生きるのが本来の生き方なのに、いつしかが主人になっていた。そこに落とし穴があった」

と。そのことに気づきますと、この言葉がってくるのですね。いろいろな特にキリスト教の歴史上の人物で言いますと、キリスト教の中で名を残した人はみんなこの問題で苦しみました。たとえばルターがそうです。

「自分はどうしたら本当に神の前に正しい人間で在り得るのか、神の前に聖なる者で在り得るのか」

と、本当に悩みに悩み抜いて、とうとう彼は修道僧のときにの中で気絶してしまっていたという。そして、

「そうだ、人間が人間を救い上げることはできない。自分で悟りを開くことはできない。もう一度神のの前に立ち返ろう」

といって、彼は内的な転換を経験して、それが宗教改革につながっていくことになったのです。その他いろいろな方の伝記を見ましでも、この問題を経験している。それがここに書かれています。

「悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」（ヨハネ8･44）

こんなことを言われたら良い気持ちのする人はありませんよね。ぐさっと刺さると思います。けれども、刺さったときに、本当にそうなのかどうなのかということを考えてみるのは、いいことではないでしょうか。飛ばしまして、

「神にする者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである」（ヨハネ8･47）

こういう言葉で結ばれています。

# ８、御霊の導きによって愛の人にされていく──ガラテヤの信徒への手紙5･13～26

次に、新約聖書のガラテヤの信徒への手紙、これはキリストのとなったパウロの手紙ですけれども、紀元後５１年頃に書かれたパウロという人の手紙です。ここにさきほどの罪の問題とか、自由の問題、愛の問題がみごとに描き出されていますので、これを引用いたしました。さきほど、

「子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」

とありました。その自由ということをパウロは引いているわけです。もちろん、パウロはヨハネによる福音書が書かれる前にこの手紙を書いているのですけれども。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によってうされるからです」（ガラテヤの信徒への手紙5･13～14）

この一句はさきほどのレビ記19章18節にありました。それを引いてきています。ここで「」という言葉が出てきます。肉というのは何かと言えば、生まれながらの人間性という意味、エゴイズムという心の働き、そういうものだと思っていただければ良いです。それから「」という言葉が次に出てきますが、「神の霊」という意味合いをもった霊という言葉です。

「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、のにはいません。肉のは明らかです。それは、、わいせつ、、礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、、、その他このたぐいのものです」（ガラテヤの信徒への手紙5･16～21）

よくこれだけいろいろ並べられたものだと思いますね。これが肉の業です。

以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は神の国を受け継ぐことはできません。

「これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、、親切、善意、誠実、、です。これらを禁じるはありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いにみ合ったり、ねたみ合ったりするのはやめましょう」（ガラテヤの信徒への手紙5･21～26）

これはもちろん、ガラテヤにいるキリスト信者たちにてられた手紙ですから、こういう内容ですが、ここで、

「霊の導きに従って歩もう」

ということが、書かれています。霊の導きを捨てて自分本位で生きて行くと、いつのまにか肉の業になってしまう。もう一度、霊の導きに自分をねて生きるならば、その結ぶ実は愛であるとあります。愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制という非常に素晴らしいがあります。ですから、ここで言われていることはいわゆる自力の修行だとか、断食だとか、いろいろなによって段々自分を立派にするというようなことは書かれていない。

ここで書かれていることは、霊の導き、聖書でいうならば、キリストという霊、キリストに現れた神の霊、こういう霊の導きに自分をねて歩んで行くならば、いつしかその人はこういう姿、人格とされていく。「されていく」というのが、大事なのです。

「自分でなった」という人は必ずそれを誇りますよ。の修行で立派になったら、そうでない人を裁きます。ところが、自分がされていったならば、何も自分で威張るところはないわけです。そこのところがさっきの「己が立派になると、己を神にする」道です。しかし、導かれてそうなっていったならば、どこまでもやはり神の前にはにすぎないというな姿であります。これが大事なことなのです。神の前に謙虚である人は隣人に対しても謙虚です。また、神の前に謙虚な人は、神からいろいろな良いものをいただきますから、それが隣人にも伝わっていくわけです。

神は愛である。その愛がいっぱい流れてきているならば、隣人を愛さないではいられないという。それが第二の本性になるわけです。キリストはそんな人です。愛さないではいられないという本性です。

それに対して、神無き世界に生きていますと、いつしか物質とか欲望の奴隷になってしまって、いらいらして他人をしたり、したりいじめたり、そういうことがその人の本性になってしまいます。

「それが悪魔を父とする姿だ」

とキリストは言われた。そんなふうに見ますと、ここに書かれていることは、昔々の我々の知らない遠くたったところで語られ受け継がれてきた事とはとても思えない、非常に現代的なさをもって我々にって来ているのではないか、というのが私の感想なのです。

そして、さきほどの世界人権宣言の底に流れている思想はこれではないか、脈々とこういうところに実を結んでいるのではないか、ということを申し上げたいわけです。プリントの世界人権宣言のところを見ていただきますと、その前文を引用しました。これは１９４５年に作成された国際連合憲章の前文を引用したものなのですが、

「国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権、人間の尊厳及び価値並びに男女の同権についての信念を再確認し、……」（世界人権宣言前文より）

こういう書き出しで始まっています。このことを全世界の政府、諸機関、教育にわる者すべてがこれを目指して努力しようということが書かれています。そして第一条が、人間は、自由、尊厳と権利とについて平等、それから理性と良心とをけられていること、の精神──これはさきほど言いました愛の精神ですね──こういうことが言われていますし、第１６条では家庭のことが言われています。そして、第１８条、すべて人は、思想、良心及び宗教の自由をする権利を有する……、とあります。

今日、申し上げたのは非常に内面的な真・善・美あるいは愛といったものを追求していく、そういう姿です。それを理想として追い求めていくところに人間の本当の尊厳の実質があるのではないか。単に神から造られたものだから人間は尊いということに止まらず、それにふさわしい姿であることに人間の尊厳の本当のがあるのではないだろうか。

そういうことを、これからいろいろなものを勉強される出発点に当たって、皆さんに訴えたかったわけです。それでは私の今日の講義はこれで終わることにいたします。

# 資料　「世界人権宣言」

（１９４８・１２・１０　第３回国際連合総会において採択）

国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権、人間の尊厳及び価値並びに男女の同権についての信念を再確認し、……。（前文より）

第一条

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

第二条

１　すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、民族的若しくは社会的出身、財産、出生その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。

２　さらに、個人の属する国又は地域が独立国であると、信託統治地域であると、非自治地域であると、又は他のなんらかの主権制限の下にあるとを問わず、その国又は地域の政治上、管轄上又は国際上の地位に基づくいかなる差別もしてはならない。

第三条

すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する。

第六条

すべて人は、いかなる場所においても、法の下において、人として認められる権利を有する。

第七条

すべての人は、法の下において平等であり、また、いかなる差別もなしに法の平等な保護を受ける権利を有する。すべての人は、この宣言に違反するいかなる差別に対しても、また、そのような差別をそそのかすいかなる行為に対しても、平等な保護を受ける権利を有する。

第八条

すべて人は、憲法又は法律によって与えられた基本的権利を侵害する行為に対し、権限を有する国内裁判所による効果的な救済を受ける権利を有する。

第一二条

何人も、自己の私事、家族、住居若しくは通信に対して、ほしいままに干渉され、又は名誉及び信用に対して攻撃を受けることはない。人はすべて、このような干渉又は攻撃に対して法の保護を受ける権利を有する。

第一三条

１　すべて人は、各国の境界内において自由に移転及び居住する権利を有する。

２　すべて人は、自国その他いずれの国をも立ち去り、及び自国に帰る権利を有する。

第一五条

１　すべて人は、国籍をもつ権利を有する。

２　何人も、ほしいままにその国籍を奪われ、又はその国籍を変更する権利を否認されることはない。

第一六条

１　成年の男女は、人種、国籍又は宗教によるいかなる制限をも受けることなく、婚姻し、かつ家庭をつくる権利を有する。成年の男女は、婚姻中及びその解消に際し、婚姻に関し平等の権利を有する。

２　婚姻は、婚姻の意思を有する両当事者の自由かつ完全な合意によってのみ成立する。

３　家庭は、社会の自然かつ基礎的な集団単位であって、社会及び国の保護を受ける権利を有する。

第一七条

１　すべて人は、単独で又は他の者と共同して財産を所有する権利を有する。

２　何人も、ほしいままに自己の財産を奪われることはない。

第一八条

すべて人は、思想、良心及び宗教の自由を享有する権利を有する。この権利は、宗教又は信念を変更する自由並びに単独で又は他の者と共同して、公的に又は私的に、布教、行事、礼拝及び儀式によって宗教又は信念を表明する自由を含む。

［奥田昌道先生講筵５『「人間の尊厳」の根底にあるもの』

１９９６年８月２４日京都キリスト召団発行より転載］